

特集●うつ病の時代—うつ病を改めて理解する

最新のうつ病の概念	防衛医科大学校病院精神科学講座 野村 総一郎・戸田 裕之
うつ病の疫学	国立精神神経センター精神保健研究所 立森 久照・他
子どものうつ病	北海道大学大学院保健科学研究院生活機能学分野 傳田 健三
青年期のうつ病	東京女子医科大学神経精神科 坂元 薫
高齢者のうつ病	筑波大学附属病院精神神経科 高橋 昌・朝田 隆
女性のライフサイクルとうつ	東京女子医科大学附属女性生涯健康センター 加茂登志子
精神保健福祉センターのうつ病休職者・退職者への再チャレンジ支援	
—精神科デイケアの新たな役割と可能性	東京都立中部総合精神保健福祉センター保健福祉部 菅原 誠
うつ病患者の家族へのサポート	NPO法人うつ・気分障害協会 山口 律子
●視点	
健康という幻想—リスク分散・バランス感覚の大切さ	福島県立医科大学医学部衛生学・予防医学講座 福島 哲仁
●トピックス	
IANPHI(世界国立公衆衛生機関協会)	国立保健医療科学院 篠崎 英夫・遠藤 弘良
●特別記事	
座談会「在宅で看取るという選択」	蛭田みどり・他

あ と が き

母子保健事業は市町村に移管され、地域の子どもの問題は市町村、保健所、医療機関に分断されて見えにくくなっています。小児臨床、教育の場にいる人からは、軽度発達障害者の対応で忙しいという声を聞く機会が多くなっています。しかし、その概念やその支援体制の現状と課題については、公衆衛生行政の中にいる人間には実感されているとは言えないように思われます。

本特集のご執筆者の一人、西牧謙吾氏とは堺のO157事件で一緒に仕事をしたことがあります。教員免許を持ち、小児科医師、保健所医師であります。昨年、東京で地下鉄の乗り換え時に偶然にバッタリ会うことができました。日本サッカー協会の子どもの支援活動の話題から、母子、学校保健に関わる話をしました。その時から私は、「公衆衛

生」誌において母子保健を取り上げ切れていないことが気がかりとなっていました。今回公衆衛生、臨床、教育の世界に通じている西牧氏のお力添えを得て、本特集を企画することができました。

自治体における取り組みの実情を調べてみると、発達障害者の取り組みには当事者の皆さんの地道な長い時間をかけての支援活動の実績があることを知りました。法施行後の社会的支援活動の展開に当たっても、当事者組織がなければ、ここまで進展してこなかったとも思われます。当事者、家族、関係者の力、民間団体の自律的な社会的支援活動、背後から支える行政の存在——そこには、公衆衛生活動のあるべきカタチが存在しているように思われます。(高鳥毛敏雄)

公衆衛生(第72巻 第4号) 2008年4月15日発行(毎月1回15日発行)

定価 2,415 円(本体 2,300 円+税 5%) (2008 年 年 ぎ め 予 約 購 読 料 28,200 円 ※ 配 送 料 弊 社 負 担)

発行：株式会社 医学書院 代表者 金原 優

☎ 113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23

本誌編集室直通 TEL (03) 3817-5718 FAX (03) 3815-7802

販売部直通 TEL (03) 3817-5659・5660 FAX (03) 3815-7804

E-mail: koshu@igaku-shoin.co.jp 振替口座 00170-9-96693 番

印刷所：三美印刷(株) TEL (03) 3803-3131

広告申込所：(株)東広社 TEL (03) 3409-8803/デザイン：デザイン・プレイス

・ Published by IGAKU-SHOIN Ltd., 1-28-23 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo

© 2008, Printed in Japan.

・ 本誌に掲載された著作物の複写・複製・転載・翻訳・データベースへの取り込みおよび送信(送信可能化権を含む)に関する許諾権は医学書院が保有しています。

・ **JCLIS** (© 日本著作出版権管理システム委託出版物)

本誌の無断複写は著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(株)日本著作出版権管理システム(03-3817-5670)の許諾を得てください。

・ 医学書院ホームページ <http://www.igaku-shoin.co.jp>

・ 公衆衛生 URL <http://www.igaku-shoin.co.jp/mag/koshu/>

編集顧問

多田 羅浩三 大阪大学名誉教授・放送大学教授

林 謙治 国立保健医療科学院

編集委員 (50 音順)

阿彦 忠之 山形県健康福祉部・衛生研究所

品川 靖子 東京都杉並区杉並保健所

高鳥毛敏雄 大阪大学大学院医学系研究科

西田 茂樹 福島県衛生研究所

編集室通信

新しい期のスタート、4月。小誌でも本号から2本の新連載が始まります。1つ目は「公衆衛生のオルタナティブ」、坪野吉孝氏(東北大学)がゲストと共に現状を語り合い、そこから発見される、公衆衛生のもう1つの世界をご堪能ください。「発想の転換」がありそうです。2つ目は「地域における自殺対策の新展開—自殺は予防できる」。本橋豊氏(秋田大学)と渡邊直樹氏(青森県立精神保健福祉センター)ご企画のもと、全国各地の地域における自殺対策の実践例、先進的な取り組みを毎月紹介いたします。自殺者が1人でも減っていくことを願って、どの記事も目指すところは、誰もが健康に、伸びやかにいきいきと暮らしていくこと、自らのいのちも他のいのちも大事にし合えること。(野中)

(担当/野中・今田)